

きむら ゆういちさん

[絵本・童話作家]



「正解のある絵」を求められて戸惑った小学校時代

幼少から絵が好きだった私は、小学校に行く前から絵画教室に通っていました。ところが入学後は、絵を描くことが楽しくなくなりました。

学校の教育は、「正しいこと」が最優先。国語でも算数でも、「これが正解だ」と教えられます。絵を描くことも例外ではありません。「空は青色でしょう」「自転車が空を飛ぶわけがないでしょう」と、自由に描くことを止められた私は、どういった絵を描けばいいか、わからなくなっていました。

このような指導を受けると、子どもは絵を描くことが嫌いになり、やがて、「大人が言うからこう描けばいいのだろう」という「正解のパターン」を覚えていきます。それによって、子どもが本来もっている表現のユニークさや個性といったものが見えなくなっていくのです。

学校は教育の場で、成績をつける必要があるとはいえ、非常に残念なことです。

子どもがほめてほしいことは 試行錯誤の過程にある

中学3年生のとき、新聞に掲載された名画を見て再び絵に興味をもった私は、高校生になって美術部を作ります。そして、高校2年生のときに大きな転機が訪れました。

図書室に飾られた私の絵を見た1人の先生が、廊下ですれ違いざま、「木村、

今度の絵、いいな」とほめてくださったのです。その先生は、美術の担当でも、学級担任でもありません。それなのに、私の絵を認め、声をかけてくださいました。

内気で自信のなかった私は、このとき初めて「この世に生まれ、生きていいんだ」という「切符」をもらったような気持ちになりました。

人にほめられ、認められるのはとても大事なことです。学校の先生には、図画工作の指導において、評価よりもむしろその子が一生懸命に表現しようとしていることを認めてあげてほしいです。

そのためには、出来映えだけでなく、制作過程をきちんと見る必要があります。その子が何を考え、どう試行錯誤したか。途中を失敗してボロボロな作品に仕上がったとしても、そこに至ったストーリーを見ていれば、必ずほめ所はあります。子どもはそこを認めてほしいのです。

人は、認められるものが1つでもあると、本当に前向きになるものです。

学ぶことには2つの役割がある

自動車や携帯電話に搭載されているナビゲーションは、「目的地」を入力するだけで、自動的に道案内をしてくれます。ですが、いくら最新の機器でも、「現在地」がわからなければ、道案内のしようがありませんよね。この「現在地」を把握することつまり自分が「世界の」「時代の」「社会の」どこにいるかをインプットすることが、学校の教育でいうと、歴

史や言語、科学など、教科の勉強です。

一方、絵を描いたり、本を読んだり、ものづくりをしたりして養われるのが、「もしかしたらこんなことができるかもしれない」と想像する力であり、時代を変えていく力、「目的地」である未来を創造する力です。

このような力を訓練する材料として、読書が活用できると思います。『あらしのよるに』の1巻目を読んで、多くの子どもたちが物語の続きを書いて送ってくれました。ヤギの気持ち、オオカミの気持ちを想像し、続きを自分で考えて表現する。それぞれが考えた内容に、いい悪いはありません。

「ただ1つの正しい答え」にこだわらず、楽しんで一生懸命にやることを評価の基準とすればいいのではないのでしょうか。

「大人」と「子ども」の違いとは

長年子どもの絵画教室を行ってきて思うのは、子どもは、たとえ年齢や身長、体重が大人の半分でも、人間としての存在が「半分」なわけではないということ。物語を作るときでも「こんなことを書いておけば子どもが喜ぶだろう」という姿勢では、すぐに子どもに見抜かれてしまいます。

子どもと大人の間に明確な線引きはできません。大人の心の中には「子どもだった自分」がいるし、子どもの中にも「大人の自分」がいる。

だから、1人の人間として、子どもと真剣に向き合うことが大切だと思います。

PROFILE

きむらゆういち ●東京都出身。多摩美術大学卒業。造形教育の指導、テレビ幼児番組のアイデアブレインなどを経て、絵本・童話作家に。『あらしのよるに』(講談社)で講談社出版文化賞絵本賞、産経児童出版文化賞などを受賞。絵本・童話創作に加え、戯曲やコミックの原作・小説など広く活躍中。著書は650冊を超え、数々のロングセラーは国内外の子どもたちに読み継がれている。また、大人の創作絵本の教室「ゆうゆう絵本講座」の顧問も務めている。
<http://www.kimura-yuichi.com/ehonkoza/index.html>

自由に絵を描き、本を読むことで 未来につながる力が養われます